

## 日々に感じることに、思うこと

田中 都 慈 子

### 社会の渦

「暇がないというのは、理由にならない。暇は、自分でつくり出すものだからである」とどこかで読んだが、読んだ当時は、そういうものかな、と思っていたが、現在では、実際に大変むずかしい、無理なような気がするのである。仕事が忙しいというばかりでなく、なにか、この社会全体が、止めることのできない渦の中にすっぽりと入ってしまったような感じがしてならない。日の豊かさ、とか重味、といったものは、どこへ消えてしまったのだろう。世紀末の現象なのだろうか。

なにか落ちついてしようと思っても、いつもせかれているような、じっくり構えることができない気持ちをもつのは、私だけなのだろうか。今日考えたことをまとめようなどと思ってもすく明日になってしまふうなのである。この状態からぬけ

出そうと思ってもぬけ出せない世の中。心の余裕、のんきさが失われたため、人の考えが、他の人を出しぬくとか、人を踏みつけても先を歩こうという傾向になってくるのではないだろうか。

「個性を大切に」といいながら、主体性のない社会で、結局は、みんなが同じになろうとしている。すぐれたものがあっても、渦にまきこまれて、消えてしまう。残念なことに、今の日本の状態では、天才は生れないことだろう。つぶされてしまうのである。教育制度もまた、それを邪魔している。

### 学校のあり方

現在の学校は、崩壊の一途をたどっているように思われる。なぜなら、教師・先生に対する尊敬や畏敬の念というものが、まったく失われてしまっているからである。生徒との間が、平等になりすぎたというのだろうか。「話し合いの場」をもつことは、も

もちろん重要なことだが、そこには、やはり、先を歩いた、教える立場にある人に対する礼儀があるはずである。また教師の側でも、それだけの権威と、すぐれた力を示すべきである。そして、すぐれた能力をもつ者を見だし、それを助け、保護し、自分よりすぐれた者にすべく、努力すべきである。それがなければ、優秀な人物は育たないし、社会全体が、落ちていくのである。

日本の今の状態では、文盲がいまいかわりに、みんな中庸をいく人物ばかりを育てている。そのため、学校を出て、社会に出て、競争ばかりで、いつもせり合って、お互いに疲れ果てている有様である。それがまた、忙しい社会を生み出していく。教師もまた、研究し、深い知識をもち、惜しみなく教える態度をもつべきである。

大学の講義を聴講しに行つて驚いたことは、学生が、先生の入口から、しかも、遅刻して入つてきて、おじぎ一つせず、堂々と一番前の席にすわるのである。本人は、平気で音をたててノートを出している。もっと驚くべきことは、誰もそれにびっくりすることなく、先生も気になさらず（？）講義を続けていらしたことだ。どうなっているのだろう。驚くこと自体、考えが古いのであろうか。

## 現場教師の再教育の場

特に幼稚園・保育園の教師は、現場に出て働いていると、雑務やら準備に追われて、ただ形だけ研究会に出席するということがなにかねない。忙しい職場——とくに肉体労働のため、疲れてお茶を飲んだり、雑談をしたりしているうちに、時間がどんどん過ぎていき、帰りが遅くなるということになる。もっと要領よく仕事がはかどらないものかと思ひながら、毎日を送るのが実態である。

たえず変化する幼い子どもたちを扱い、もっといいやり方はないだろうかと思ひ、たくさん具体例をもっているのに、それを考えたり、まとめたり、調べたりする時間がいつもほしいと思ふ。順番にでも、一年位の勉強・研究する時間を与えられて、再び学生の身分となるシステムは、夢なのだろうか。それが、実現できれば、教師にも意欲がわき、新しい考えが、毎日の保育の中に生きてくるのではないだろうか。

## 親と子ども

この数年、日曜日に電車に乗ると、必ず、子どもたちがカバンをもって元気なく乗っているのに出会う。塾に通っているのでは

る。帰ってくるころは、電車のはしからはしまで渡り歩き、人  
ぶつかりながら、連結の間の戸も閉めずに、友だちとぞろぞろと  
歩いていく。どうしてこんなにみんな、休みの日や、学校の後  
に、塾に通わなければならないのだろう。「がんばってね」とい  
って母親は、ニコニコして子どもを送り出し、当の本人は、いや  
いやながら出かけていく。学校で十分教えてもらえないのだろう  
か。どうしても補充しないといけないほど、勉強がむずか  
しいのだろうか。幼稚園に入るための予備校(?)もあるそうで  
ある。

学校に全部まかせるといいながらも、家庭教師を頼む。すべて  
人まかせ。そして学校にも、親にも不信感が増していく。なんと  
姑息的なことだろう。

雑草の繁ったあき地で、鬼ごっこや、ボール投げをし、夕食に  
どろんこになって帰り、あわてて宿題をしても、別に困らなかっ  
た時代もあったのに。

## 環境

そして現在、庭もつぶして敷地いっぱい建った家、ごみごみ  
した道路。どんな細い道にも車が入ってくる。雑草もアスファル  
トの割れ目から、こっそりとはえ、夏になっても、あのむせかえ

るような草いきれは、都会では感じられなくなった。おたまじゃ  
くしも、かえるも、かぶと虫やばったまでも、デパートで買う世  
の中である。

「昔はよかった」と老人のいうようにいつてばかりもいられない  
が、こうも自然が、だんだんと失われ、空気のよごれがひどくな  
ると、そうもいいなくなる。

休み時間にクローバーの花で冠を編んだり、校庭に生えている  
木いちごやくわの実を、こっそり食べたことなど、話をしても信  
じてもらえなくなることだろう。

電車のドアが開くと、人の間をかきのけて、「ねえ、おかさ  
ん、とったよ、とったよ」といいながら、あいた空席のまん中に  
両手で左右をたたいている子ども。ゆうゆうと後からきて、「お  
ばあちゃんはこちら、○○ちゃんは、そっちょ」といってすわる母  
親、なんともはやである。

なにか一つ心棒がぬけている。それでいて回転が速い。しっか  
りとつかまわって生きていかなければ、ふり落とされそうな世の  
中。それが、今の社会のような気がする。どこをどうすれば、も  
う少しゆっくりできるのだろうか。まわりの景色をみながら、  
のんびりと、ばかんと何も考えずにこの社会という車に乗ってい  
られないものだろうか。

(暁星学園幼稚園)